

## 7・2 新生児集団における染色体異常の発生率に関する研究— 2

神奈川県立こども医療センター

黒 木 良 和  
松 井 一 郎  
山 本 佳 史  
中 井 博 史

### 研 究 目 的

新生児集団の染色体異常個体頻度に関する研究は、すでに欧米にはいくつかあるが、本邦にはまったくない。そこで年間出生数の多い一般産院の協力を得て、日本人新生児集団の染色体異常個体頻度を推定し、併せて新生児期のリンパ球に見られる染色体異常の種類と頻度を調査した。

### 研 究 方 法

昭和50年6月1日から52年1月31日までに1,859名の染色体標本を作成し、991名分の染色体分析を終了した。

発見された染色体異常個体は7名で、頻度は0.706%であった。

#### 性染色体異常

45, X / 46, XX 1

#### 常染色体異常

47, XX, +21 1

47, XY, +mar / 46, XY 1

46, XY, Gp+ 1

46, XX, inv(2) 1

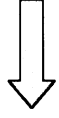
45, XX, t(13q 14q) 2

また新生児集団におけるリンパ球の染色体異常は現在までに観察された1,323細胞中に二動原体染色体0.075%, 染色体切断0.60%, 染色体ギャップ2.80%であった。

### 考察ならびに要約

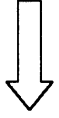
諸外国のデータと比較してはまだ例数は少ないが、一応の頻度が出た意義は大きい。すなわち個々の染色体異常症例はほとんど1例のみの出現で頻度推定は出来ないが、すべての染色体異常を合計した頻度は0.706%で、これまでの欧米の頻度とほぼ一致した。またDown症候群の1例を除いて、転座染色体保因者はもちろんのこと逆位や小さな過剰染色体を有する個体でも、表現型はほとんど正常であった。この事実は染色体異常個体の正確な頻度推定には、臨床観察に基づき調査では不十分で、全出生児の染色体検査が必須であることを示している。

またリンパ球の染色体異常についての調査も開始した。染色体異常は放射線のほかウイルスや種々の化学物質でも起こり、加齢とともに染色体異常の頻度が増加するといわれている。新生児集団のリンパ球に見られる染色体異常のデータは、ヒトに対する種々の環境変異原の影響を評価する際の基礎的資料としてきわめて重要なものと思われる。日本人新生児集団における信頼性の高い資料を得るため、この研究は是非とも継続したいものである。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 研究目的

新生児集団の染色体異常個体頻度に関する研究は、すでに欧米にはいくつかあるが、本邦にはまったくない。そこで年間出生数の多い一般産院の協力を得て、日本人新生児集団の染色体異常個体頻度を推定し、併せて新生児期のリンパ球に見られる染色体異常の種類と頻度を調査した。